学校通信

四日市市立大池中学校　第２４号

令和７年９月１６日（火）発行：校長

大池中学校だより

戦後80年。今だから平和を考える　No.1

戦後80年。恒久の平和を願い、今私たちに何ができるのかを考える意味でも重要なこの1年。大池中学校では、３年生では修学旅行において、「平和学習」の一環として広島平和記念資料館、広島市立本川小学校と袋町小学校の敷地内にある平和資料館に出かけました。２年生では「平和学習」として、すべてのクラスで世界で由一の被爆国として考えるべきことなどを通じて、映像などから被爆した方々のお話を聴いたり、平和の尊さや命の大切さについて学習を進めました。

【写真は３年修学旅行原爆ドーム前にて】

大池中学校の子どもたちの「平和学習」のまとめともなる作文や感想文からも、戦後８０年の重要な年に、今でも世界で大義のない戦争が起こっている現状をかんがみ、改めて命の大切さと、誰もが幸せに生きる平和な社会を実現するために、自分たちに何ができるのかを考え、行動の一歩を踏み出せる大池中学校生になってほしい。『当たり前の日常はとても幸せです』ということに気づいてほしいという願いを込めて。**学校だより第２４号と２５号に子どもたちの声を交えて紹介します。**

今年８月６日(水)広島市で行われた『平和祈念式典』で、「こども平和のつどい」に参加した世界12ヶ国の子ども代表の小学６年２名の「平和への誓い」から。「One voice。たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。大人だけでなく、子どもである私たちも平和のために行動することができます。」（子ども代表 ２名の児童の言葉から抜粋して）

『 当たり前の日常はとても幸せです 』・・・

そんな日常は「居心地（いごこち）の良い学級であり、学年であり、学校の中にある」と思う。そんな日常を、２ 学期の生活の中で体育祭や文化祭の取り組みや毎日の授業や部活動等の日常の生活の取り組みを通じて感じてほしい。なにげない日常が幸せであることを・・・。

【９月８日(月)「２年５組学級通信 9/8 発行第１９号より」の子どもたちのコメントからの抜粋】

２年５組のみなさんのコメントから。２学期が始まって１週間が経過しての感想（１週間、みなさんはどう感じた？！）２年５組のみなさんからの言葉には「当たり前の日常」について考えさせてくれます。みなさんのコメントにはいつも仲間がいます。いつもクラス・学年のことを考え、想うメッセージがいっぱい。それが、「居心地のよい学級・学年・学校」を支える原動力（エネルギーや活力）となります。だから全校で共有したいのです。

・久しぶりに友だちと会うことができて、夏休み中に話せなかった分、たくさん話すことができてとても嬉しかったです。　【２－５女子生徒】

・クラスの雰囲気が変わらずに楽しい感じで嬉しかった。２学期めちゃ楽しい　【2－5 男子生徒】

・夏休みという長い期間。部活の仲間や友だちとしか会っていなかったのもあり、クラスメイトの顔を見ることができて嬉しかった。みんなの笑顔を見ることができてとても嬉しかった。　【２－５女子生徒】

けっして、全校生徒のみなさん全員が同じような考え方や思いではないかもしれません。しかし、**このような考え方に共感し、寄り添い、一緒に頑張っていける人が、1人でも2人でもクラス・学年、そして学校全体に増えていくことによって、大池中学校はもっともっと『 当たり前の日常が幸せ 』に思えるようになり、一人ひとりにとって『 居心地のよい学校 』になっていくと思います。**どうでしょうか‥‥。**2学期も「 当たり前に勉強(学習)ができることに感謝 」したり、「 家族、友だち、先生。大切な人と一緒に過ごす。笑い合う、そんな当たり前の日常が幸せ 」に思えるように･･･。**

修学旅行で広島平和記念資料館の見学や平和学習を重ねてきた３年女子生徒の人権作文から。

人権作文　『 未来へつなぐ平和と命 』３年　〇〇　〇〇 さん

【3年生学年通信　7月15日(火)第18号から】(学年主任の〇〇先生の言葉から･･･)

１学期も残りわずかとなりました。新しい環境や仲間との関わりの中で、楽しいこともあれば、悩むこともあったかもしれません。 そんな日々の中で、みなさんが使った「言葉」は、誰かの心を支える力にもなり、時には傷つけてしまうこともあります。 言葉は目に見えませんが、とても大きな力を持っています。何気なく発した一言が、相手の心に深く残ることもあるのです。修学旅行で訪れた広島では、命の尊さや平

和の大切さについて学びました。 その経験をもとに、みなさんは人権について考え、人権作文を書きました。今回はその中の作品を紹介したいと思います。

この作文は、「死ね」という言葉について真剣に向き合った作品でした。 友人同士が、冗談半分の会話の中で使われることのあるこの言葉が、どれほど人の心を傷つけ、時には命に関わるほどの重みを持つか。自分自身の体験や周囲の出来事を通して深く考え、言葉の力と責任について考えてくれました。

言葉は、相手を傷つけることも、支えることもできる力を持っています。 だからこそ、私たち一人ひとりが、「命を大切にする言葉」「思いやりのある言葉」を選び、使っていくことが大切です。他の作文も含めて、みなさんの作文には、そうした気づきと、自身への振り返り、これからの自分への決意が込められていました。学びが、日々の生活の中で生かされ、互いを尊重し合える関係づくりと仲間づくりにつながっていくことを願っています。

『 未来へつなぐ平和と命 』3年　〇〇 〇〇(　　)さんの人権作文から

「死ね」　これは、休み時間の教室で聞いた言葉です。最近こんな言葉をよく聞くようになった気がします。クラスメイトたちは、友達同士でふざけ合って話すようなトーンで笑いながらこの言葉を使っていました。修学旅行の平和学習から学んだことをもとに、今の私の考えを書こうと思います。

広島平和記念資料館には、想像の何倍も悲惨な風景が広がっていました。血だらけの服や破損した鉄柱、中身がまる焦げになったお弁当箱や大やけどを負った人の写真。この景色を言葉で表そうと思い、真っ先に出てきたのは、「地獄」でした。中でも見ていて、一番辛かったのは、当時の人たちの思いが表された文でした。

亡くなった家族への思いや、大切な人への心の底からのメッセージ。どの文章からも、書き手の「生きたい」という強い思いが伝わってきました。これらを読んだ時、私は、「生きる」ということの尊さがやっと分かった気がしました。私たちは、祖先の生き抜いてきた証があるからこそ、今ここで生きていられるのです。

あなたは、「生きる」ことを大切にできていますか？

現代では、生きていることは普通、明日友達に会えることも普通、明日の私が生きている、ということ全てが当たり前のように考えられていますし、私もそう思っています。「明日もしかしたら死ぬかもしれない」なんてことを考えながら、毎晩布団に入る人も少ないでしょう。実際ずっとそんなことを考えるとなると、不安で仕方ありません。けれど、毎日生きていることは当たり前という考え方は少し違うと思うのです。私たちは、平和に生きていることに慣れすぎて、「生きる」ことの幸せに気づけていないのです。

初めに書いた話に戻ります。クラスメイトは冗談で「死」という言葉を扱っていました。これを聞いた時に、周りは笑っていたけれど、私の心の中はもやもやしていました。当たり前のことではありますが、「死」という言葉は軽々しく扱ってはならないのです。平和記念資料館で見てきた当時の人たちの「生きたい」という思いも戦争時に必死に生きてきた証もすべて踏みにじることになると思います。「死」の本当の怖さも、「生きる」本当の尊さも知らない私たちは、「死ね」という言葉を簡単に発することを絶対に許してはいけません。あのとき教室で「死ね」と言ったクラスメイト、そのとき周りにいた人、そして、「死ね」と言われた子はどんな気持ちだったのでしょうか。あの言葉を聞いたとき、どんな反応をすればよかったのでしょうか。あのとき自分は聞き流してしまいました。でも、今思えばもっと声をかけることができたらよかったと思います。

「冗談でもよくないよ」と注意したり、もし言われた子が少しでも暗い表情をしていたら寄り添ったりすることもできたかなと思いました。そう思っていても自分だけで行動することは勇気がいるし、なかなか難しいです。

私一人だけではなく。周りの雰囲気も変わっていくべきだと思います。

～　中略　～

「命の重さ」などと言われてもまったくピンとこない人も、もちろんいると思います。では、もし自分の一番大切な人が死んでしまったら、あなたはどう考えますか？あなたの近くにいた人が亡くなってしまったらどう思うか想像してみてください。きっと誰も明るい気持ちにはならないと思います。私はこのことを思い浮かべたとき、命への考え方が大きく変わりました。このことを考えたときに感じた気持ちが、「命の重さ」だと思います。

この命の重さを実感することで、自分の言葉の一つ一つに責任が持てるのではないかと考えました。

これからの私たちは、今生きているこの世界を当たり前と思わないことが大切です。「命の重さ」をもっと知るために、過去に起きた戦争を理解することが一番の近い教材だと思います。平和記念資料館で見たあの景色が今の平和な社会を築いています。私たちも、今見ている平和な景色を未来につなぐために「生きる」ことの意味を伝えていかなければならないと思いました。そして、私たちにつながれた命を、今までの考え以上に大切にししていくべきだと考えました。